

中日翻訳エラー分析に関する一考察  
—大学・大学院の翻訳指導の現場から

板垣 友子

ITAGAKI Tomoko

【摘要】

近来日中経済関係一直稳定而发展的情况下，对拥有专业优质翻译人员的需求不断增加。2015年发出来的ISO17100（国际防疫服务流程标准）为了保证翻译质量，对翻译人员资格和能力做了明确地解释。日本很多大学也以培养翻译人才为目的而进行日中翻译教育。为了不辜负社会的托付，我们应该培养翻译能力很强的人才。因此，笔者借用日英翻译教育研究的成果，用MNH-TT错误分类体系，通过事例分析，尽量导出客观的评价标准，检讨如何提高学生们的“翻译者力”。

【キーワード】

日中翻訳      翻訳教育      校閲カテゴリ体系      翻訳者力

目次

1. はじめに
  - 1.1 研究背景
  - 1.2 校閲カテゴリ体系
  - 1.3 研究概要
2. データの収集
  - 2.1 翻訳学習者
  - 2.2 翻訳課題
3. 事例分析
  - 3.1 校閲カテゴリによるエラー数
  - 3.2 校閲カテゴリ別のエラー事例
  - 3.3 翻訳学習者の学習レベル別の結果
4. 結論
  - 4.1 エラー付与の問題点
  - 4.2 翻訳教育とは
  - 4.3 翻訳者力の向上を目指して

## 参考文献

### 1. はじめに

#### 1.1 研究背景

日中間の経済往来は今年新型コロナウイルス感染の影響で落ち込んだものの、近年は安定した成長ペースとなっており、日中間の翻訳に対するニーズは底堅い。機械翻訳、IT 翻訳が喧伝されて久しく、普及も進んでいるものの、人による翻訳への需要は翻訳そのものに IT 翻訳のチェックという業務が加わり、全体としての成長傾向は変化していないと言える。そんな中、国際化標準機構 (ISO) は 2015 年に ISO17100 (翻訳サービスの品質及び引渡しに直接影響を及ぼす翻訳プロセスのあらゆる側面に対する要求事項を規定)<sup>1</sup>を出した。日本では JIS 化する動きもあり、今後の翻訳業界では企業も個人も ISO 認定が標準化していくのではないだろうか。

この ISO17100 の中では、翻訳者の専門的力量と資格も明確に規定されている。専門的力量については、「(1) 翻訳：原文の内容を理解し、訳文言語に変換する能力全般。(2) 言語・テキスト形成能力：原文言語を理解し訳文言語を流暢に用いる能力と、訳文を作成するための知識。(3) 調査・情報収集：専門知識とリサーチスキル。(4) 文化：原文言語・訳文言語それぞれの文化的価値体系や最新用語などを的確に理解し使用できる能力。(5) 技術：ツールや IT システムなどを駆使して訳文を作成する能力。(6) ドメイン：原文言語で書かれた原稿内容の理解と、それを適切なスタイルや用語を用いて訳文言語で再現する能力」とされており、資格としては「(1) 認定された高等教育機関 (主に大学や大学院) の翻訳、言語学、言語研究関連学位、または同等の教育機関での翻訳訓練を含む学位を取得 (2) 認定された高等教育機関の翻訳以外の学位取得+専業専門家として 2 年の翻訳経験 (3) 専業専門家として 5 年の翻訳経験」<sup>2</sup>のいずれかを取得していること、と定めている。

今後、世界的な趨勢から見て、いずれは日本の大学・大学院でも ISO17100 が求める翻訳力の育成を保証していくことが求められる可能性もある。

#### 1.2 校閲カテゴリ体系

質の高い翻訳者養成のための翻訳教育においては、学習者が作成した目標言語テキストを分析・評価していく「校閲カテゴリ体系」が必須である。翻訳学習者に対するフィードバックを想定して作成された校閲カテゴリ体系としては、英国リーズ大学の MeLLANGE プロジェクトによる 3 階層 44 カテゴリのものがあり、これを基に 2012 年に Babch 他によってオンラインの翻訳教育支援環境「みんなの翻訳学習 (MNH-TT)」向けにさらに整理・単純化した 2 階層 16 カテゴリからなる MNH-TT 校閲カテゴリ体系が作成された<sup>3</sup>。

豊島ら (2106) は「翻訳教育での利用を意識した翻訳してエラー分類体系の再構築」(『言語処理学会発表論文集』22, 2016) において、MNH-TT に基づき、日英翻訳教育の現場からエラー事例を抽出、整理

<sup>1</sup> サイマル・インターナショナル 「どこまで知っていますか-「ISO17100」について」『通訳・翻訳ブック』  
<https://thbook.simul.co.jp/entry/2020/iso17100>

<sup>2</sup> 同上

<sup>3</sup> 豊島知穂ほか「校閲カテゴリ体系に基づく翻訳学習者の誤り傾向の分析」『通訳翻訳研究への招待』16, 2016 年, P48

し、大まかな優先順位を定め(表1)、次に判定基準を明確化しつつ、エラーの分類体系を再構築している(表2)。この再構築されたエラー分類体系は、前提として大学の翻訳実習における学生の英語から日本語への翻訳を事例として分析した結果、得られたものである。

表1 エラーの大まかな優先度

Lv1	訳が未完成である
Lv2	起点言語文書の要素に対して過不足や誤解がある
Lv3	目標言語の文法的・統語的な問題がある
Lv4	目標言語文書に質的な問題がある
Lv5	納品・公表するプロダクトとしての問題がある

(豊島他「翻訳教育での利用を意識した翻訳エラー分類体系の再構築」『言語処理学会』22, 2016年, P861 より)

表2 エラーの分類体系(Xの分類はMNH-TTの分類)

Lv1	未完成(STの内容が翻訳されず残っている)
X4a	未翻訳
X6	曖昧さ未解消
Lv2	誤訳(STの内容に対し過不足や誤解がある)
X7	用語の訳出誤り
X1	原文内容の欠落
X2	原文にない要素の付加
X3	原文内容の歪曲
Lv3	目標言語の文法的または統語的な問題
X8	コロケーションの誤り
X10	前置詞や助詞の誤り
X11	活用の誤りや数・性などの不一致
X12	綴り誤り・誤変換
X13	句読法に関する誤り
X9	その他の文法的・統語的な誤り
Lv4	目標言語文書の質の問題
X16	結束性違反
X4b	直訳調

X15	表現のぎこちなさ
Lv5	納品・公表に際しての問題
X14	レジスタ違反

(豊島他「翻訳教育での利用を意識した翻訳エラー分類体系の再構築」『言語処理学会』22, 2016年, P862 より)

### 1.3 研究概要

本稿では、1.2で紹介した再構築された分類体系を、中国語から日本語への翻訳に応用して事例分析を試み、学習者の中日翻訳におけるエラー、習熟度別のエラーの傾向について考察し、客観的・公平な評価をする上の依拠を提示したい。その上で、翻訳力をどう向上させるか、さらに「翻訳者力」の養成について考えたい。

## 2 データの収集

### 2.1 翻訳学習者

本稿では、学部学生の翻訳文と、大学院修士課程の学生の翻訳文を分析対象とする。双方の学生を合わせて「翻訳学習者」とする。

本稿で研究対象とする中日翻訳データは、2020年5月に翻訳学習者24名からオンラインで収集したものである。その内訳は以下の通りである。それぞれA、B、Cグループとする。

①中国語専攻3、4年生…8名(半年～1年間の中国留学経験者の日本語ネイティブ、HSK4～5級レベル) →以下Aグループとする

②学部交換留学生、派遣留学生…8名(日本語専攻3年目、中国語ネイティブ、日本語能力検定1～2級レベル) →以下Bグループとする

③大学院翻訳専攻の1年生8名(中国語ネイティブ、日本語能力検定1級レベル)  
→以下Cグループとする

### 2.2 翻訳課題

翻訳課題文書はWEBサイト「東方資訊」2020年3月5日付の記事<sup>4</sup>から抜粋した中国語文を「メディア翻訳 IT 分野」として出題したものである。

原文は以下の通りである(218字)。ただし、大学院生に対しては同記事の後半部分も課題としているが、ここでは共通部分のみ対象とする。

<sup>4</sup> <http://txw.eastday.com/a/200325092335418.html?recomendtype=e>

---

中国电商与物流行业的快速增长的另一面，是仓储物流公司的业务量剧增，劳动力成本高企，效率难提高，运营压力大，物流自动化、智能化的诉求越来越强烈。据前瞻产业研究院统计，中国整体物流自动化普及率在20%左右，而发达国家为80%，中国的智慧物流行业仍有很大的发展潜力。

「立镖机器人」是一家专注于智能移动机器人（AGV）研发、生产、部署，提供柔性物流自动化解决方案的公司。该公司核心产品是机器人智能物流分拣系统——“小黄人”，目前已迭代到第四代。

#### 〈参考訳文〉

中国では電子商取引と物流の急速な成長拡大にともない、倉庫物流業界の取扱量が急増している。人件費は高止まりし、効率を上下にくく、経営が圧迫されており、物流のオートメーション化、AI化へのニーズはますます高まっている。中国の前瞻産業研究院のデータによると、現在、中国の物流におけるオートメーション化の比率は20%前後で、先進国の80%と比べると、中国のスマート物流業界にはなお大きな成長の余地がある。

「Zhejiang LiBiao Robot（浙江立鏢機器人有限公司）」は、無人搬送車（AGV）の開発、製造、配置を専門とし、フレキシブルな物流オートメーション化のためのソリューションを提供する企業である。主力製品はスマート仕分けロボットの「小黄人（ミニオン）」で、すでに第4世代となっている。

---

この課題は全員が自宅で訳出を行ない、ワード文書で作成し、オンラインで提出した。その際、辞書、参考資料、インターネットの使用については制限をしていない。指示としては、この翻訳の目的を「新聞記事として読まれる前提の日本語文に翻訳する」こととした。

### 3. 事例分析

#### 3.1 校閲カテゴリによるエラー数

学生による翻訳文を校閲カテゴリのエラーの分類体系に従い、以下の図1の決定木のように分類した結果、以下の表となった。

図1 校閲カテゴリ付与のための決定木（豊島他「翻訳教育での利用を意識した翻訳エラー分類体系の再構築」『言語処理学会』22, 2016年, P862より）

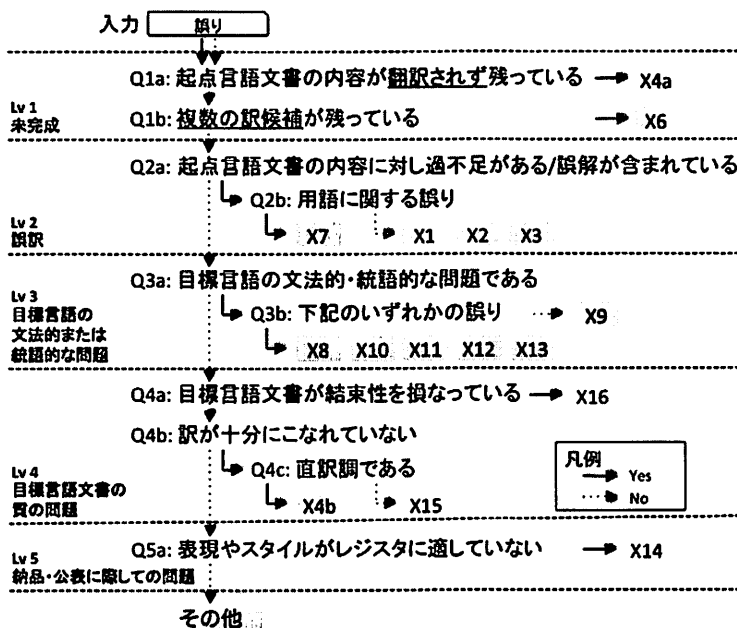


表3 翻訳者別のエラー数

学習者	Lv1		Lv2				Lv3					Lv4			Lv5	合計		
	X4a	X6	X7	X1	X2	X3	X8	X10	X11	X12	X13	X9	X16	X4b	X15		X14	
A-1		3	4					1								1		9
A-2	1	2	5						1	1					1			11
A-3			4		2													6
A-4			7	1	1		1					1					1	12
A-5	1	1	7									1		1			1	12
A-6		1	5					1					2		1		1	11
A-7		1	6		1		1							1				10
A-8		1	2					1					1	1				6
小計	2	9	40	1	4		2	3	1	1		2	3	4	2	3		77
B-1	1	1	3					1	2			1		2				11
B-2	1		4	1						3			1					10
B-3	1	1	6					1						1				10
B-4	1		7		1			1										10

B-5	1	1	8				1	2						1			14
B-6		1		2													3
B-7		1	6				1	1						3			12
B-8		1	4		2		1	1				1			1		11
小計	5	6	38	3	3		3	7	5			2	1	7	1		81
C-1			8			1	1	1									11
C-2	2		3					1	1			1	1				9
C-3			5		2												7
C-4		1			3			1									5
C-5	1		1			1			2						1		6
C-6		1			1				1								3
C-7		3	2		2												7
C-8		1	4		8				1				1				15
小計	3	6	23		16	2	1	3	5			1	2		1		63
合計	10	21	101	4	23	2	6	13	11	1	0	5	6	11	4	3	221

表4 グループ別エラー数

	エラー	Aグループ	Bグループ	Cグループ
Lv1	未完成			
X4a	未翻訳(翻訳されず残っている)	2	5	3
X6	曖昧さ未解消(複数の訳候補が残っている)	9	6	6
Lv2	誤訳(STの内容に関し過不足がある/誤解が含まれている)			
X7	用語の訳出誤り	40	38	23
X1	原文内容の欠落	1	3	0
X2	原文にない要素の付加	4	3	16
X3	原文内容の歪曲	0	0	2
Lv3	目標言語の文法的または統語的な問題			
X8	コロケーションの誤り	2	3	1
X10	前置詞や助詞の誤り	3	7	3

X11	活用の誤りや数・性などの不一致	1	5	5
X12	綴り誤り・誤変換	1	0	0
X13	句読法に関する誤り	0	0	0
X9	その他の文法的・統語的な誤り	2	2	1
Lv4	目標言語文書の質の問題			
X16	結末性違反	3	1	2
X4b	直訳調	4	7	0
X15	表現のぎこちなさ	2	1	1
Lv5	納品・公表に際しての問題			
X14	レジスタ違反	3	0	0
	合計	77	81	63

### 3.2 校閲カテゴリ別のエラー事例

以下はカテゴリ別の具体的なエラー事例である。(以下、カッコ内は参考訳を提示)

#### (i) Lv1 未完成

##### X4a 未翻訳

ST: “智能化” TT: 「知能化」 (スマート化/AI化)

ST: “诉求” TT: 「訴求」

##### X6 曖昧さ未解消

ST: “运营压力大” TT: 「運営圧力が大きく」(経営への圧力が大きく)

#### (ii) Lv2 誤訳

##### X7 用語の訳出誤り

ST: “电商” TT: 「電気商」(Eコマース/電子商取引)

ST: “机器人智能物流分拣系统” TT: 「人工知能移動ロボット」(スマート仕分けロボット)

ST: “成本高企” TT: 「コストの高い企業」(コストは高止まりし)

ST: “快速增长” TT: 「著しく発展しており」(急速に発展しており)

ST: “专注于” TT: 「焦点を当て」(を専門に/注力し)

##### X2 原文にない要素の付加

ST: “另一面,” TT: 「様々な訴えも増えた」

ST: “发达国家为 80%” TT: 「先進国の場合は 80%」

##### X3 原文内容の歪曲



ST: “运营压力大” TT: 「压迫した運営能力」(経営への圧力が大きく)

(iii) Lv3 目標言語の文法的または統語的な問題

X8 コロケーションの誤り

ST: “效率难提高” TT: 「効率が高くなりにくく」(効率を上げにくく)

X10 前置詞や助詞の誤り

ST: “目前已迭代第四代” TT: 「現在に第4代に発展した」(すでに第4世代となっている。)

X11 活用の誤りや数・性などの不一致

ST: “据前瞻产业研究院统计” TT: 「前瞻産業研究院のデータにより」(前瞻産業研究院のデータによると)

ST: “有很大的发展潜力” TT: 「ポテンシャルが秘めている」(ポテンシャルがある/秘められている)

X12 綴り誤り・誤変換

ST: “迭代” TT: 「繰り返られている」(更新されている/繰り返されている)

X9 その他の文法的・統語的誤り

ST: “专注于” TT: 「取り組んでおり」(取り組む[企業である])

(iv) Lv4 目標言語文書の質の問題

X16 結束性違反

ST: “劳动力成本高企” TT: 「労働力コストも高くなっているため」(人件費は高止まりしており)

X4b 直訳調

ST: “发展潜力” TT: 「発展潜在力」(成長の余地がある/成長の潜在力がある)

ST: “机器人智能物流分拣系统” TT: 「ロボットインテリジェント物流選別システム」(スマート仕分けロボット)

ST: “智慧物流行业” TT: 「知能物流業」(スマート物流業界)

X15 表現のぎこちなさ

ST: “20%左右” TT: 「20%ぐらいで」(20%前後)

(V) Lv5 納品・公表に際しての問題

X14 レジスタ違反

ST: “仍有很大的发展潜力” TT: 「まだ大きな発展の可能性があります」(なお大きな成長の余地がある)

3.3 翻訳学習者の学習レベル別の結果

学習者のレベル別にエラー数全体を見ると、学部(中国語ネイティブ学生>学部の日本人学生>大学院のネイティブ学生という順となる。

それをレベルごとに見てみると、Lv1(未完成)、Lv2(誤訳)については、Aグループが56、Bグループが55、Cグループが48となった。Lv3(目標言語の文法的または統語的な問題)については、Aグループが9、Bグループが17、Cグループが10となった。Lv4(目標言語文書の質の問題)については、Aグループが9、Bグループが9、Cグループが3となった。Lv5(納品・公表に際しての問題)では、Aグループが3、Bグループが0、Cグループが0となった。

以上の結果、「未完成」「誤訳」レベルでは、学部生の日本語ネイティブと中国語ネイティブの間に大きな差はなかった。Lv3「文法的、統語的問題」レベルでは、学部生中国語ネイティブに多くのエラーが生じていた。Lv4「質の問題」では学部生の日本語ネイティブと中国語ネイティブの間に大きな差はなかった。大学院生中国語ネイティブのエラーは相対的に少なかった。

「訳出誤り」に次いで、Aグループで多かったエラーは、Lv1の「曖昧さ未解消」であった。これは原文の理解不足のためであろう。また、Bグループでは「前置詞や助詞の誤り」と「活用の誤り」で、これはITの運用能力不足が原因と思える。一方、Cグループでは「原文にない要素の付加」が目立って多くなっている。これは、接続詞がほとんどないSTを「日本語らしく」しようと、原文を読み解き、その内容を訳出すべく工夫した結果のように思われる。しかし、「経済記事」であるから、日本語の文体も新聞記事としてふさわしいかが問われる。

共同通信社によると「記事の大原則は『正確に、早く』だ。それに加え、難しい現象であっても『分かりやすく』『コンパクト』にまとめることが重要である」、「曖昧な表現、分析中断、思考放棄の表現(「ということで、」「いずれにしても」など)を避け、具体的で生き生きとした表現を工夫する」<sup>5</sup>としている。さらに文体は常体が標準となる。このような書き方の原則を前提に翻訳しなければならない。新聞記事としてのレジスタを守る必要がある。また、「原文にない要素の付加」エラーについてはLv4「ITの質の問題」にも関わっているように思える。

## 4. 結論

まず、中日翻訳の教育現場で「校閲カテゴリ体系」を用いたエラー分類の結果をもとに、その有用性について考えたい。さらに、その結果を踏まえて「翻訳者力」を高める指導について検討したい。

### 4.1 エラー付与の問題点

翻訳については、評価が難しい。もともと持つ語学運用能力のレベルが異なるため、訳出された文にもレベルの差は歴然としてある。一律に「良い訳文」に「高い評価」をすることは簡単だが、それには疑問が残る。例えば、中学生の作文と高校生の作文を同じ基準で比較することはできない。とはいえ、学生への指導には客観的な指標が必要なことは言うまでもない。

今回の事例の結果、どのグループでも最も多かったのはLv2「誤訳」の「訳出誤り」であった。経済とIT分野が融合した内容であり、専門用語も多かったことから、この結果は妥当と思われる。しかし、日本語と中国語の翻訳の場合、日英翻訳とは異なるファクターがある。「漢語」の扱いがその一つだ。「漢語」がそのまま使われている場合、「未翻訳」なのか「訳出誤り」なのかを判断しにくい。例

<sup>5</sup> 『記者ハンドブック第13版』共同通信社、2020年1月、P.8~9

えば、「智能化」を「知能化」としたエラーは、どちらと判断すべきだろうか。または「直訳調」とした方が良いのだろうか。この点はヨーロッパで考案された校閲カテゴリ体系のMNH-TT校閲カテゴリや、それを日英翻訳の教育現場に合わせて再構築された校閲カテゴリ(表2)で分類しようとしても、納得のいく分類をすることは困難である。日英翻訳のカテゴリが日中翻訳にそのまま流用できるのか、疑問を持たざるを得ない。

さらに、エラー付与については複数のチェッカーが必要ではないかと考える。カテゴリの判断が難しいエラーもあり、整合性のある結論を得るには、複数のチェッカーで検討する必要がある。今回は筆者一人でエラー分析をしたが、次回は複数のチェッカーによるさらに客観性の高いエラー付与を試みたい。

## 4.2 翻訳教育とは

SLとTLの運用能力を高めることは、「翻訳教育」のごく一部、基礎部分でしかない。基本的に大学での翻訳教育には二つの目的が設定できよう。一つは「翻訳という方法を通して外国語・日本語の運用能力を向上させること」、もう一つは「翻訳能力の高い実践的人材育成」である。例えば、杏林大学では「プロフェッショナル養成」をカリキュラムポリシーに入れており、通訳・翻訳の授業は、概論から演習まで、学生の段階に応じて提供されている。演習の場合には、どちらかという民間の通訳翻訳スクールに近い、実践的な練習を多く取り入れている。

ベイカー&サルダーニャは以下のように翻訳教授法を提案している。「まず、母語の言語文化内でのテキスト受容と産出というコミュニケーションプロセスを導入し、その後第二言語の文化的な能力を教育する」という段階を踏み、「次にビジネスレターや報告書といったさまざまなテキストタイプに応じた『異文化間の』理解と産出の練習を行う」としている。そして、翻訳教授の主要目的として「テキストの受容と再生に際して機能的に問題解決ができるように学生を教育することである」としている。さらに、「機能主義的枠組みは、実際の翻訳行為に関わる要因として、翻訳の依頼人、目的、受容者を重要要因と捉えることから、教授法を考える上で一つの有力な立場となりうる」としている。<sup>6</sup>

私自身も上のような機能主義的立場から、授業を構築している。翻訳演習は、半年から1年間の現地留学を経た日中両国の学生が、翻訳という新たなフィールドに挑戦していく授業である。よって、文法説明などはほとんど行わず、スコポスに合わせた日本語での表現、異化、同化などのストラテジーの使い方、様々な翻訳手法を紹介し実践していくこと、ISO170100の「専門的力量」の基礎を身につけることが翻訳演習の主な目標となっている。大学院修士課程の日中通訳翻訳専攻においては、さらにプロとしての専門的知識、技術を提供している。まさに、ISO17100が求める「専門的力量」をつけるための課程である。

## 4.3 翻訳者力の向上を目指して

ISO17100に定める専門的力量には、「(1) 翻訳：原文の内容を理解し、訳文言語に変換する能力全般。(2) 言語・テキスト形成能力：訳文言語を理解し訳文言語を流暢に用いる能力と、訳文を作成するための知識。(3) 調査・情報収集：専門知識とリサーチスキル。(4) 文化：訳文言語・訳文言語

<sup>6</sup> モナ・ベイカー&ガブリエル・サルダーニャ著、藤森文子監修・編訳「翻訳研究のキーワード」(2013年、研究社) P89

それぞれの文化的価値体系や最新用語などを的確に理解し使用できる能力。(5) 技術：ツールやITシステムなどを駆使して訳文を作成する能力。(6) ドメイン：原文言語で書かれた原稿内容の理解と、それを適切なスタイルや用語を用いて訳文言語で再現する能力」とされているので、SLとTLの理解、運用能力、テキスト形成能力に加え、調査・情報収集、文化理解、IT技術なども含めた総合的な「翻訳者力」が求められている。

SLとTLの運用能力を上げることは厳密な意味で「翻訳教育」には含まれないと私は考える。大学、大学院で求められる「翻訳教育」とは、「適確な調査・情報収集を行い、文化を理解し、技術を使いこなし、適切なスタイルや用語を用いてTTを作成する」こと、つまり「翻訳者力を上げる」ための学びを提供することではないだろうか。

その目標を達成するためには、どのような指導が効果的なのかを検討することが今後の課題となる。まずは、①日中翻訳における「校閲カテゴリ」を作成する。そして②「校閲カテゴリのエラー分析」による評価を学生に明確に示せるようにし、問題解決を指導することが必要である。

今後はさらに多くの事例を収集し、多くの先行研究にもあたり、さらに「日中翻訳の校閲カテゴリ」作成に向けて努力していきたい。

#### 参考文献:

- サイマル・インターナショナル 「どこまで知っていますかー「ISO17100」について」『通訳・翻訳ブック』  
<https://thbook.simul.co.jp/entry/2020/iso17100>
- ジェレミー・マンデイ著、鳥飼久美子監訳(2009)『翻訳学入門』みすず書房
- ダニエル・ジル著、田辺希久子他訳(2012)『通訳翻訳訓練』みすず書房
- モナ・ベイカー&ガブリエラ・サルダーニャ著、藤濤文子監修・編訳(2013)『翻訳研究のキーワード』研究社
- 胡振剛、鐘玉秀「日中翻訳の難しさをめぐって」(2007)長崎ウエスレヤン大学『現代社会学部紀要』5巻1号、P63-66
- 宋曉凱、権慶梅、徐鳳、「中国の大学院における日本語通訳・翻訳教育の現状と課題」(2014) ICCS Journal of Modern Chinese Studies Vol. 68(1)
- 豊島知穂、藤田篤、田辺希久子、景浦峯、Anthony Hartley「校閲カテゴリ体系に基づく翻訳学習者の誤り傾向の分析」17号、2016、P47-65
- 豊島知穂、藤田篤、田辺希久子、景浦峯「翻訳教育での利用を意識した翻訳エラー分類体系の再構築」『言語処理学会』22、2016年、P47-65
- 大西奈菜美、山田優、藤田篤、景浦峯「翻訳学習者が誤訳をする理由」『通訳翻訳研究への招待』18号、2017年、P88-P106
- 山本真佑香、田辺希久子、藤田篤「翻訳学習者の学習過程におけるエラーの傾向の変化」『言語処理学会』22、2016年、P865-868